

Re:ゼロから始める魔女教改革(旧題:魔女教大罪司教の『傲慢』)

サンタルチア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世の記憶を思い出したと思ったらそこはリゼロの世界だった主人公——アルゴルは自分がかなり物語と深く関わりすぎて絶望するのだがここでアルゴルに天啓が！

『魔女と関わっているならもう自分で魔女教作って宗教改革すつか』
これは割と重要なポジションに着いてしまった主人公がルターのような宗教改革を目指す物語。

注意！この主人公はアホです。

目次

プロフィール	1
原作開始前	
プロローグ	6
ジュースって誰？（疑問）	12
ただマウントを取っただけなのに…	20
拠点は大事、はっきりわかんだね	24
うわっ…私の魔女教、やばすぎ？	31
それはとつても気持ち悪いなって	39
『強欲』の真心	45
魔人が生まれた日	51

プロフィール

真面目な紹介

名前：アルゴル

陣営：魔女教陣営

種族：ハーフェルフ

性別：男

身長：132cm

体重：生きてきた人生の壮絶さよりかは軽い

特技：ツツコミと魔獣狩り

趣味：パンドラと散歩・パンドラと戯れること・パンドラを撮ること

以下説明（という名の作者の思ったことと詳細）

この作品の主人公。魔女教（笑）創設者でエキドナの魔法を食らって頭を強打したら前世の記憶を思い出した。マゾかな？

何故か知らないが成長が止まっており、スバルと邂逅時には迷子だと勘違いされる（予定）。うくんこれはシヨタ。

銀髪金眼で髪をツインテールにしている。肌は病的なまでに白く、イメージはFateシリーズに登場するアルトリアオルタ。

服装は原作でエミリアがスバルとでえとした時のローブっぽいものを着用している（パンドラも同じ服装）。なおそのローブはこれまた原作同様認識阻害の術式が組まれており、これを着ていると周囲の人々と同化するように認識される。

現ルグニカ親竜王国の辺境のエルフの里で生まれた。400年前は村の名前とか変わってると思うので現ルグニカ親竜王国としている。地名を考えるのが面倒とも言える。

10歳で『敬虔』の魔女因子を宿し、力の制御を失ったアルゴルは集落を壊滅させる。そこから流れてエキドナらに出会う。

サテラが封印された後に白鯨を討伐し、フリーユゲルの大樹と共に白鯨の亡骸はリゼロ世界の七不思議になる。もつと不思議なものあるだろ。

能力について

『無価値の贄』

別名加護持ち&権能持ち絶対殺すマン。説明は三話参照。それ以外にも能力はあるが本編に登場したら追記でここに書きます。

『時喰み』

失伝魔法の一つ。このすばのカズマが習得しているドレインタツチを命に関わるレベルまで性能を引き上げた凶悪な魔法。効果範囲は自身の視界に映る全てのものを対象にできる。

白鯨を石にした能力

名称不明。ただ一つ言えるのは彼が悪魔の頭アルゴルという事だ。

§

「——はあはあはあはあ」

閑散とした森に何か息を切らしながらゆっくりと駆ける速度を緩める。

「——おええ」

そしてその場で蹲り、吐瀉物を胃の中が空っぽになったと錯覚するほどぶちまける。それもそうだろう。少年は食後を全力で疾走したため食ったものが逆流することは想像に難くない。

少年が思い返すのはつい数刻前の惨状。そしてそれを引き起こした元凶である自身。

「みんなみんな……くだけで、ちった」

今日は少年の誕生日だった。いつもと違う日という意味では今日以上に嬉しいことはない。少年は思っていた。

両親や集落の人々が彼の誕生日を祝福している最中、集落の住人である一人の女の子が唐突に爆ぜた。

その女の子は少年の幼馴染だった。さっきまで此方へと祝福の言葉を送ってきていたはずだったのに今は肉塊へとその形を変えていた。

すると次々に爆散していく集落の人々。

少年はただただ怖かった。自分もあんなふうになってしまわないか。と、いう訳では無い。

自分がそれをやっていると自覚したからだ。

そして残るは少年と少年の両親だけとなった。

自分はこんな事をしたくない。思考で拒んでもチカラは無慈悲にも両親を爆ぜてしまった。

『ごめん、なさい……ごめんなさい』

少年は自分が血で染まるのもお構いなしに両親だったものを引き寄せ謝罪の言葉を口にする。

しかし、帰ってきた言葉は——否、あつた。

『——。産まれてきて、ありがとう、と……う』

『お前、は……オレ達、のほこ、り……だ』

それは言葉足らずであったが紛れもなく成長した息子への愛だった。

程なくして事切れた両親や集落にいる全ての者を肉塊を一つも残

さずに埋葬した少年は集落近くの森へと走り今に至る。

——ああ。狂ってしまったえたらどんなに楽なのだろう…。

「けひつ、くきやきや！けかかかかかかかかかか…」

「——君は何故狂ったフリなんてしているんだい？」

「あ？」

それは唐突の出来事だった。奇しくもペテルギウスが
ナツキ・スバルへと問い掛けたようにエキドナが少年へと問い掛け
たのだ。

少年は蹲った身体を起こしながらその姿を視界へと捉える。しか
し爆散が——ない。

「な、なんで？」

「おや？どうしたんだい？まるで何故ワタシが死んでいないのかと言
いたげな顔をしているね。それは甚だ疑問だよ。ワタシだって君に
問いたいことがあるさ。ワタシの姿を見ても何故発狂しないのかと
ね？普通ワタシの姿を見たら良くて発狂悪くて死？かな。まあその
事については一先ず置いておこう。まだまだワタシは君に対しての
疑問が尽きないからね」

それは白い女だった。いや、白い。とは言っても外見的特徴が白い
髪に白い肌と言うだけで服装はその逆で黒を基調とした服装だった。
何よりも少年から見ても分かる美貌を持ち合わせていた。

驚愕と困惑が入り交じって何を話そうかと少年は悩んだ。

「あ、あなたは誰ですか」

ようやく絞り出した言葉がこれしかないのかと内心毒づきながら
も相手の出方を待つ少年に対し女はこれは忘れていたよと、口にし言
葉を続ける。

「ワタシの名前はエキドナ。悪い魔女さ」

「ボクの、名前……は——。だ、だけでもう、この名前は使わない……から別の名前を決め、る」

「ふむ……ならワタシが決めてあげよう。さてさてどうしようかあまり味気ない名前だとワタシが面白くないからとは言ってもあまりにも変な名前だとそれは後々困るなあ……」

少年は腕を組みながら必死に考えるエキドナを見ながらふと頭に浮かび上がった名前を口にする。

「——アルゴル」

「ここはシエル・ファントムハイヴで行つとく……ってアルゴル？なんだいそれは？」

「分からない、けど急に頭の、中から出てきた、から……あとシエルなんぢやらは、長いから、ダメ」

「ふーん。まあ君の名前だしワタシがとやかに言う謂れはないさ。君とは長い付き合いになりそうだからこれからよろしくとでも言っておこうか」

「よろしくお願い、します」

エキドナの提案した名前をバツサリと却下した少年——アルゴルはどこかむず痒さを憶えながらも自身の名を心の奥底でもう一度口にする。

悪魔の頭
アルゴルト。

原作開始前 プロローグ

やあ、ボクの名前はアルゴル。前世の記憶を思い出したしがない魔法使いさ。

ん？のっけから変だって？ボクだって変だと思うよ、うん。ほんとにどうしてこうなった？

「そうそれはつい五分前のことさ」

「ナチュラルに心読まないでくださいあと急に喋らないでくださいびつくらこいちやったから」

「びつくらこいちやったというのは今日日聞かないけど…そんなに言われてワタシはショックさ」

そう言っておよよと傍から見なくても嘘泣きだとわかる演技をする白髪の女性はとつても面倒臭いと思いませんか？ボクは思います。

「何だかものすごく泣いていますけど何しに来たんですか——エキドナ？」

「いや、君が気絶した経緯を語ろうと思ったんだけど…不要だったかい？」

「そうならそうと早く言ってくださいよめんどくさいことしないでください不快です」

「相変わらず君はワタシに対して遠慮と言うものが存在しないね!？」
「でも、嫌ではないんでしょう？」

グッ！と言葉を詰まらせるエキドナを尻目に段々とボクは前世の記憶を思い出した経緯を思い出してきたぞ……そうだ。

「ボクが気絶した原因ってエキドナの所為じゃん」

「そうだよ。ワタシが放った魔法で君は防御も受け身もせずに派手に飛んでしまったのさ。地面へと叩きつけられる時に頭を激しくぶつけたって訳」

「ふーん……で？ボクに何か言うことはありますか？」

「いや、悪いとは思ってるさ……けど急にノーガードになる君も悪いとワタシは思うんだが」

そう言つてジト目を此方に向けるエキドナ。いや、だとしても『ボクは悪くない』と括弧を使つて喋つてみるが鳥肌が立ちそうになつたので止めた。

「それに君はたかがワタシの魔法にやられる程脆くないだろう？」

「当然ですよ。エキドナの魔法如きに潰されてるんだつたらボクは生き残っていませんよ」

前世の記憶を取り戻した影響か一般的な倫理観を得ることが出来たボクは今まで生きている事が不思議に思うくらいの経験をしている。

「はあ。邪魔さね、ふう」と言われながらセクメトに消されそうになつたり「ルゴルゴ食べていい？」つて言いながら人の両腕を崩壊させながら来るダフネに今更ながら恐怖を感じた。あれ？もしかしてボク、他のお仲間から嫌われてた？

「それに伊達にアナタ達と魔人を名乗ってませんから」

『敬虔』の魔人アルゴル。世間ではそんな風に呼ばれているようだけどワタシは君の事をとても好ましく思っているよ」

「急に何ですか？え？ナンパですか？ごめんなさい雰囲気的にはアリよりのアリかもしれないですがすみません無理です」

「君以外にワタシに向かってそんなに言う存在をワタシは知らないよ」

いや、別にエキドナの事を嫌いって訳では無いんですよ？ただ思っている事がついつい口に全部出てしまうだけなんですよ。

「だからエキドナが全部悪いとボクは思います」

「どうしてその結論に至ったんだい!？」

「じゃあ一体このよく分からない矛先をエキドナ以外に何処に向ければ良いんですか？」

「他魔女ワタシの友達」

そうか、その手があった！

「分かりました。ではボクは用事が出来たので行つてきますね」

「ボクが言うのもなんだけど、あまり他人の意見というものを鵜呑みにし過ぎるのは良くないんじゃないのかい？」

「今回ばかりは割と参考になりましたしそもそもボクはキミ達のこととはとても興味があるので。それにミネルヴァにも用がありましたので」

ではいざ、いつも怒っているツンデレヴァさんの元へレッツラゴー。

「と、いうわけで来ました」

「何がというわけよっ！」

ボクが来た理由を説明するとより一層怒っているミネルヴァさんはてさてその怒りの矛先はおそらくエキドナさんだな？

「いやアルゴルもその矛先の中に入ってるわよ！」

「ボクがキミを怒らせるようにしたなら謝りますよ。だけどエキドナさんだけは許さないでください。全部エキドナさんの所為だと思う」

ので」

「ごめんなさい、と謝罪をして頭を下げた。こうすることによってボクは許しを貰えるのだ。フツ…勝ったな。」

「責任転嫁してんじゃないわよ！どのみちエキドナに唆されてここに来たってことはわかっているんだからね！っーんだ」

「そんな可愛らしい反応しないでください。『っーん』って実際に自ら言っている人初めて見ました」

「っ！なに、バカ！もう、信じらんない！バカ！バツカ！バーカ！バカじゃないの！バカみたい！バカ！本当に、バカ！バカで、えっとバカ！」

顔を真っ赤にしながらバカのオンパレードをするミネルヴァ。ボクはバカだったのか。いや、バカではなからう（反語）。ボクはバカでは無い、アホなのだ。うん、言ってる悲しくなってきた。

「ボクは悲しいよミネルヴァ」
「何ですよ？」

漸く昂りが収まったのかこちらへと体制を向き直すミネルヴァはボクの発言に疑問を呈した。

嗚呼、本当に哀しい。ミネルヴァの身に起こるであろう運命が残酷すぎる。

「キミは最近戦場へと出向いては人々を殺す^{癒す}という行為をずっとやっているんですね」

「当然よ！あたしは争いをこの世界から無くすために苦しみ悲しみ泣き喚き、痛がる声をこの拳で撲滅すること。あたしの怒りが、あたしの憤怒が、この拳の癒しがあたしの——全てだもの」

「それは大層な事ですね。でも、一つ忠告しておきます。そうやって

理想の解決方法を取り続けているといっしか不測の事態に陥った時
キミは絶対発狂する」

「それは…そんな事はないわよ！あたしの拳は全ての人を癒す為に、
争いを無くす為にあるものなの」

確かにミネルヴァの言い分は至極真つ当なものだけど生憎とボク
はその権能の恐ろしさを識っている。そして彼女の最期も覗てしま
っている。

「———そうですか。ボクからの忠告は以上です。それと頑張つて偉
いですよミネルヴァは」

「なっ！ほ、褒められるのには慣れてないのよ！バカ！」

こういう所がツンデレ何だよなあ。

後日、案の定と言うべきかミネルヴァが死んだ。やっぱりね。

残った魔女はサテラとエキドナだけになってしまった。

「その名称も直に彼女一人だけの名称になってしまっうね」

「そんな吐き捨てるように言う必要ありますか？それもボクに」

憎々しいと顔が語っているエキドナは兎も角ボクはサテラに対し
て悪感情は抱いていない。

正直のところボクはサテラに滅ぼされるとは微塵も思っていない。
いや別にこれは驕っているという訳じゃないんですよ、はい。

「いやはや、君の権能はワタシ達に対して相性が良すぎて困つてしま
うよ」

「キミ達って言うよりも一部の武芸者ならもう封殺ですからね」

ボクが身に宿した権能——無価値の贄はあらゆる『加護』や『権能』を無力化するというぶっ壊れな能力がある。

「だからと言ってデメリットもあります」

「まず君竜車に乗れないもの」

「ボクは走った方が地竜より速いのでそこら辺は大丈夫です……そんな事より」

ボクは話を一旦切り上げ、眼前にいるエキドナに一つ尋ねた。

「それで？この滅びを迎えるしかないルートにいるキミは最後の晩餐をどうするつもりで？」

「娘には既に『試練』を与えたさ。後は彼が何とかしてくれると思っているよ」

「まあそれがいいですね。ではボクは安全圏からキミ含めて大陸の半分がサテラによって滅ぼされるのを指をくわえて見守りますよ。ボクにはサテラを無力化する術は無いので」

無論、他の人が世界を滅ぼしてやるとかほぎくのならボクはソイツを全力で潰すが相手が相手だ。ボクにはどうしようもない。

そもそもサテラってえ？魔女って……ここりゼロかよ！

ジューズって誰？（疑問）

一旦状況を整理しよう。

ボクはどうやら『Re:ゼロから始める異世界生活』というアニメに転生？したらしい。

らしいというのはボクの前世の知識の中でサテラという魔女がいる作品はリゼロというアニメしか知らないからだ。

他にもあると言われたらそれまでだがボクはリゼロであると断言出来る証拠が目の前に現れた。

「——ッ!!!」

「——白鯨、ですか」

白鯨。その名の通り白い鯨だが水中ではなく空中を漂いながら霧を吐き出す災厄。『霧の魔獣』

白鯨はリゼロの中で出てくる敵だ。

確かダフネが生み出したペツト食料だった気がする。だってボクにめっちゃ自慢してきたもん。「これでお腹がいっぱいに！」って。

いやそうはならんやろ。というよりも白鯨を生みの親お前だったんかい自然発生かと思った。

そう言えばアニメでヴィルヘルム・トリアスがコレ白鯨に殺られた妻の仇を取っていたシーンを見たような見てないような。

「正直のところ今ここで白鯨を潰してしまうとどうなるんでしょうか？」

今白鯨をくぶつ壊くす↓テレシアが討伐しなくてもいい↓ヴィルヘルムがケツチャコしない↓魔女教LOSE（は？）

アレ？殺ってよくね？

「野郎、ぶっ殺してやる!!!」

「——ッ!!!」

言うな否やボクは白鯨へと向かって走り出した。そもそもコイツ四百年という長い歳月かけて悪さしてるならもう悪さする前に殺つちまおう!

疑わしきは罰せず(強制)。これが基本、原則、約束、ギアス。何言つてんだ?

「つと……ペットに負けるほどボクは弱くはないです」

「——ッ!?!」

アニメでは三大魔獣の一角と言われていたが所詮はダフネの食料ペットなのだ。ダフネが生み出したものなんて結局は自己満の為の生きた人形。ダフネに喰われて終わりだ。

ボクと白鯨の距離が近づくにつれその迫力が顕になってくる。だがボクはこれ以上の迫力満点なものをずっと知っている。

「その程度ですか?」

「——ッ!!!」

ボクに向けて巨大な口を開きながらその場で止まった白鯨に安い挑発を送る。大体Cランクつてところかな……そう思うとボク自身の規格外さが窺えるな。

「二つ忠告しておきます。キミはキミが出せる最大限の全力を出した
が志半ばでボクに負ける」

「——ッ!?!」

「だからどうぞボクに見せて下さい。キミの、キミだけのチカラをボクは最大限の敬意を持って迎え撃ちます。最大限の敬意……そう!」

こんな感じで。

ボクは白鯨を敬いながら恭しく礼をした。

ボクの言葉が理解出来たのかは分からないが白鯨は三体に分裂して霧を吐き出しながらこちらへと突貫してきた。

普通の人なら自身の『死』を悟り、絶望の表情を浮かべるこの状況。しかし、ボクはコレを見たい訳では無かった。だってそれは――

「――それはダメですよ白鯨。オリジナルダに頼った贋作ッのワザは…それはキミのではないです。因みにダフネは飢餓の魔眼つて言うボクが名付けた型月にあるような魔眼がありまして……つて聞けませんか」

突然だがペルセウスの物語の中で鎖に繋がれたアンドロメダを助ける為にペルセウスが化け鯨を退治するという話がある。これは割と有名な話なのかもしれないけど化け鯨はどのようにペルセウスに退治されたと思う？

結論！

「メドューサの目が合つて石になってしまった。この場合メドューサはボクになりますね。そしてキミはさしずめアンドロメダを襲う化け鯨。実に実にいい物語では無いですか！」

もしかしたらボクはペルセウスなのかもしれないがボクは悪魔悪魔の首の首アルゴルだ。なんでそんな知識知ってるかって？

星の名前ガチ勢です対戦よろしくお願いします。

こちらへと体当たりをしようとしていた白鯨だったがボクが頭を上げた直後に石になってしまった。周囲が明るくなってくる……ああ、そんなものもあつたんだった。

「これ白鯨どうしよう？処理に困りました…放置でいいですね」

これで魔女教も……って待て待て。
そもそも魔女教って何時できたんだ？
ボクは石になった白鯨を後にし、思案する。

「えっと……今は魔女教という名前を耳にしてないからまだ活動はして
いない。あれ？魔女教っていつ頃から活動しているんだ？」

確かペテルギウスが『怠惰』とか言っていたから少なくとも他にも
いる訳だ……他って誰がいる？

思い出せ……どうしてアニメだけで妥協していたんだ前世のボク。
書籍もあつたのに手を付けないとは……って言ってもアニメ見終
わつたの死ぬ前だった。

「サテラは封印された？からここからナツキ・スバルが召喚されるま
で四百年ちよつとですか……え？」

四百年。

この長い時間で何をすればいいのか全く分からない。何かしら目
標をたてないとこの先やって行けない。

独りで死ぬしかないじゃない！と、黄色い髪の魔法少女が言ってそ
うだがそんなものスルーだ。

物語に介入する？いやいや、アニメしか知らないボクに外伝とか原
作に関わる事件なんて分かるわけないから却下。あ、でも鬼姉妹ラムとレムの工
ピソードは分か……んない時系列ががが。

ボクは前世の記憶を得ることになったが前世ではほのぼのした
ジャンルを中心とした作品を見るただのオタクだったのだ。

ので、ボクはアニメにハマるきつかけになった某黒の剣士が活躍す
るアニメ以降バトル系のアニメなど有名所しか見てないのだ。つま
りそこまで興味が湧かなかつたのである。

魔法少女もの？ハハ、見事に騙されましたがなにか？（3敗）
だからなのかアニメを見た後に続きが知りたくて書籍を買う。と
いったような展開はバトルものでは割と少なかった。

「はあ……もつと気になったものは即買っておけば良かったのですかね……」

ここに来て割と深く後悔しているが無い物ねだりしても仕方ない。
ならばどうするか。

結論！

吹っ切れた

「色々悩んでましたが今はここがボクの現実なのでですからボクが自由にやっていいですよね？」

そうと決まったボクの行動は早い。

第一目標として主人公のスバルが来るまでにやさいせいかつ……
じゃなくてこの世界が優しい世界になるように頑張ろう！

ボクは広い平原でそう決意をするのであった。

§

「先ずは不穏因子でしかない魔女教をどうするかですね」

てかここ何処よ？全然知らないところに出ただけど……え？ルグ
ニカで合ってる……よね？

「迷子になってしまいました……誰かいませんか！」

「——フリユ……………………………………から」

「ん？何処からか声が……此方でしょうか？」

フラフラ歩いてしばらく経って途方に暮れそうになったが前方から人影が一つ見えてきた。

「あ」

「あ」

互いに驚愕するボク達。いや、だってこんな誰だって驚くに決まってる。てかエキドナのところで面識合ったわ。

「えっと……久しぶりですかね——ジューズ」

「は、はいお久しぶりでございますアルゴル様……ご存命で何よりです」

そこに居たのは緑髪の背の高い美青年であるジューズがいた。本当に久しい……最後に会ったの何時だったか……ん？今まで違和感なかったけど前世の記憶を思い出してすっごい馴染み深い容姿をしている……まさかとは思うけど——

「えっと……ジューズ。今更聞くのは少し失礼ですがキミはペテルギウスという名前に心当たりはありますか？」

「?ええ、それが私の名前ですから……それがどうかしましたか?」

スウーーーーー(過呼吸)。

はあ!?

「それにしてもアルゴル様はフリーユージェル様の旅のご同行はなさらなかったのですね」

「え?そんなものがあつたのですか?」

「はい、レイド様とファルセイル様とフリーユージェル様、そしてボルカニカ様が『嫉妬の魔女』封印の旅ですが……」

「そのような誘いは無かったですね」

途端ボクとジューズに微妙な空気が流れる。

一つ言いたい。

フリーユージェルって誰？

いやファルセルとレイドは面識あるよ？レイドなんかは喧嘩売られたし。「激マブじゃねえんかよテムエ」ってな感じて木の枝振り回してこられて正直ビビった記憶がある。あれ？なんだろう急に殺意が…。

てかジューズってあのアニメで散々敵キャラムーブしてた人じゃないですかヤダー。

どうして今の状態から首の角度は90。(はあと)あんなふうになったんだ？

「そういえばジューズ。魔女教というものを知っていますか？」

「魔女教、ですか？存じ上げませんが…それはなんででしょうか？」

ほう、魔女教知らないのか…ええ知らないならどうすんだよ？まだ魔女教無いのか。じゃあなんでジューズは司教の地位にまで付けているんだ？

もしやジューズって魔女教創設者？

「具体的な目標は決めていますませんがそうですね…サテラの悪評を世に知らしめないようにする慈善団体のようなものにしていこうと思うんです」

「なるほど…つまり魔女教なる慈善団体を作り、人々の誤解を解くように宣教するようなものでしょうか？」

「ええそうです。ボクと着いてきてくれますか？」

気づけばボクはそのような事を口にしていた。どうしてこのようになったのかと言えばつまり…『魔女教が無ければ自分で作ればいいじゃないか！』と、悪魔のような発想を思いついたボクは結果このようにジューズへと提案した。

「物は試しです。その誘い、是非受けさせて頂きます。アルゴル様」

この日ボクが創設者となった『魔女教』が誕生した。

ただマウントを取っただけなのに…

「というわけで魔女教を創設したは良いのですが…肝心のメンバーがボクとジューズだけ。はつきり言っただけで今後についてこの二人のみで話すと言うのは決められるものも決められませんね」

「では教徒の勧誘からして行きますか？」

うーん…原作とかキペテルギウスミをナツキ・スバルが倒すまでしか知らないんだよね。あ、後なんか最後の最後で他の大罪司教？とやらが出てきていなくもないような気がしていたが…：確か中の人が鬼にならないなら殺そうとする人と銃の引き金を躊躇いもなく引いて殺そうとする人だったと記憶しているけど…：やっべー全然わっかんねえ。というか中の人有名なのになんで覚えてないんだろう不思議。

中の人ネタはここまでにするとして今は魔女教の課題である人員不足解消について話していかないと。

「人員不足解消の為にはそれからの方がいいですね。では教徒が増加するまではその方針で行きましょうか」

「分かりました。アルゴル様とは別で行動をすることにしますか？」

「その方が効率的ですので一先ずここでお別れですね。ではまた会いましょう」

という事でジューズとは別行動になりました。ぴえんとか言ってる場合ではないか。

来た道に戻るジューズの影が見えなくなるのを確認するとボクも行動を開始した。

というかジューズってホントにどうして狂っちゃったんだ？ボクは彼がなんの原因もなしにああなるとは考えられない。何故ならボクは彼を今まで覗てきたからだ。日頃の行いやエキドナを交えて会話もいくつかしたし今だっただけで話した。

「ホントにどうしてあのようになってしまったのでしょうか？」

「——その話、私にも聞かせてくれませんか？」

背後からの声にボクは驚く。気づかなかった、声を掛けられるまで……ナニモンだ？

というか痴女だ！なんだアレ！服なのあれ？布一枚羽織っただけに見えるのはボクだけか？！

はあ珍しく取り乱した。と言うよりもこの気配って……

「——キミは…魔女ですか？」

「おや、ご存知でしたか？一応自己紹介を。私はパンドラ、『虚飾の魔女』と呼ばれています」

魔女ってまだ生きてたの？てつきりサテラに飲み込まれたのかと思っただけそういう生き残るのに特化した『権能』でもあるんだな〜ってそうじゃなくて。

「して、パンドラ。話とは？」

『私とアルゴルが初対面なはずが無い。彼は私と旧知の仲で魔女教の創設を手伝っている』

するとどうだろう。ボクの範囲内に入ったらしい『ナニカ』が行き場を失い無に帰った。

ははーん…さては今『権能』を使ったな？

恐らく『権能』の機能に疑問を感じたパンドラはここで初めて困惑の顔をした。『権能』頼りの魔女みたいだな。『権能』が破られたからってそれはいくら何でも驚きすぎなんじゃないの？

「さしづめ因果の書き換えと言ったところですかね。まるで球磨川禊オールフイクションの『大嘘憑き』を思い浮かべますが本質は少し違いますね」

「——え？ど、どうしてですか？な、何故私の『権能』が通じない？」

「それはボクの『権能』によるものですね。詳しくは言えませんがボクには『権能』や『加護』といった己に不利益利益関係無しに向かつてくるモノを無効化するという『権能』があります。例えば今パンドラがしたように因果の書き換えを行った場合ボクの半径5キロは『権能』の対象範囲内に入ってしまうので『権能』の能力が無効化されるということになります。よって今のキミは『権能』を使えないただの魔女ですね。まあこれの他にもまだいくつか能力はありますが今は話すことではないでしょう」

「ふぁい?」

ん?何か一気に喋ったせいなのかパンドラが思考放棄してアホ顔になっている誰がこんな事を…ボクでした。

確かに普段当たり前のように使えるものが使えないという不安は一気に恐怖へと変わる。それをデフォでやっているボクはどうして『敬虔の魔人』なんて言われていたのか甚だ疑問だ。

兎も角この世界は強い能力があるってだけでは生き残れない難易度ナイトメアの世界なのだ：ほらレムラム姉妹がいい例だね。ラムはあんなに子供の頃強かったのに魔女教の教徒に角折られちゃったし。アレ?もしかしてボクが魔女教創設してこのままボクがこの魔女教を動かしていけば色々救われる者達が沢山いるのでは?(迷推理)

「パンドラ。キミは驕っていたのがキミの敗因の一つだ。自分には『権能』があるからという先入観とボクの事を詳しく知らなかったことも理由の一つかもしれないですね。ですが詳しく事情を知らなかったボクも悪いかもしいれませんね。して、もう一度問います…キミの目的はなんだい?」

「……………やっ」

「ん?」

此方へと顔を伏せて何か呟いた。パンドラはガバツと顔を上げて

言った。

「ごめんなさい!!!」

「お、おう……そこまで大声で出さなくても」

「ごめんなさい私が悪かったですので殺さないでくださいほんの出来心だったんです目的は封印を解こうと思ったんです生意気なこと言っでごめんなさい許してください私この『権能』がどういものか理解してこれを使えばという浅はかな思いでこんな事をしました本当にごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……ううう……ぐすつ……うええええええええん!!!」

状況が状況なだけについていけない。

さてここで一句。

幼女がね 布一枚で 泣いてるよ

完全に事案ですねありがとうございます。

というか一番最初に会った強キャラムーブどこ行ったようわよう、よつよいが現実で見れると思ったら蓋を開けたらただメスガキムーブしてただけ。

この世界ってこんなギャグ要素あった……わ。あったよ第一次マヨネーズ戦争みたいなやつとかお酒飲んで酔っ払うやつとかOVAとかどの世界線なのって思っって当時見てたかもしれない。

一先ずこの幼女どうしょ？

ボクは未だに泣き喚いているパンドラをどうするか思案するのであった。

拠点は大事、はつきりわかんだね

パンドラ幼女事件から少し（と言っても年単位）経ち、魔女教の人員も増えてきた。

パンドラとジュースを初めて会わせて見た時何故かボクを見る目が子を育てる親を見るような感じで見られた。いや、そうはならんやろ。こちらとら見た目シヨタぞ？「いつからアルゴル殿は子供だと錯覚していた？」とかヨン様みたいに呟いているんじゃないよ全く。

アレ？ジュースってボケ枠だったっけ？

さて、因みに話題に上がっているそのパンドラは今こうなっている。

「ねえアルにい！あのリング買って！」

「わかったから一先ず落ち着いてくださいね。リングは逃げませんか……あ、リング二つください」

「おうよ。リング二つで銅貨八枚だ」

なんとということでしょう。あんなに年不相応だった口調がこんなにも純粹無垢に！

私痴女ですというような服装は匠ボクの手によってボクと同じ白いローブという双子コーデのような服装に！

これが匠の手掛けた……じゃねえよ。何この小動物系幼女。あ、パンドラだったわ。

一先ず店主に銀貨をいくつか支払いお釣りとリングを手に入れたボクは二つあるうちのリングの一つをパンドラへと渡し、パンドラはリングに目を輝かせながらその実を食していく。

もきゅもきゅと幻聴が聞こえてくるようにリングを頬張るパンドラを尻目にもう一度思う。

何この小動物系幼女。

いやほんとにどうしてこうなった？出会って直後はこんなに懐いておらずむしろ逆でめっちゃ警戒と恐怖心を持っていた。

話し掛けただけで肩をビクツと震わせて「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」と機械のように連呼をしていたけど暫く（とは言っても50年くらい？）共に行動していたらこうなった。うん、訳分かんらん。

大したこともしていないのに何時の間にか懐かれていたという感じだ。果たしてパンドラの内にどのような心変わりがあったのかは彼女のみが知る。いくらボクでも他人の心情を100%理解する事は神ではないので不可能だ。食蜂心理掌握操析なら出来るかもしれないがボクはその世界線にいない。まあ嫌われるよりかは全然イイので放置しているが。

一旦置いて
閑話休題。

ボク達は今何をしているのかというと人員の追加だ。

ジューズがめっちゃ張り切っているがボクは未だにパンドラ以外の人員の確保をしたことが無い。

その事を言うとジューズは「大丈夫ですよアルゴル殿。アルゴル殿はゆつくりと責務に捕われずに今の世を楽しんでください」と言ってきた。アナタ、勤勉デスね。じゃなくてそれだとジューズがただの社畜になるんだよなあ……ボクがやらなきゃジューズへの負担がとんでもなくなるのでジューズには楽しみながら人員の確保も行うと伝えておいた。

「そういうえばアルにい。今どこに向かっているの？」

「とりあえずルグニカ親竜王国この王様に会いに行こうと思ってるんですよ」

なんかファルセイルがもうそろそろ亡くなりそうとの噂を聞いたから最後のご尊顔を拝みに来たけど流石に街には出向いてないか。あ、もう寝たきりか。

一先ずリングを食べ歩きながらファルセイルがいるお城に辿り着いたボク達はファルセイルに会いに来たとの旨を伝えると何故か衛兵に囲まれた。

「お前達は何者だ！ファルセイル様には近づけさせないぞ！」
「えっと…ボクはファルセイルの友人の関係です。ファルセイルがそろそろ亡くなってしまうとの噂を聞いたので会いに来ました」
「ファルセイル様の友人だと？貴様、名を名乗れ！」
「今はただのアルゴルです。そしてこちらはパンドラ。ボクの付き添いです」
パートナー

すると衛兵はここで暫く待っているとボク達へ伝えると確認をしに行つたのか城の中へと入つていった。

はあボクのこと覚えているといいけど…もうあの人がいくつだ？もう御歳八十歳になりかかつていた気がする。

「ねえアルにい？ファルセイル国王に会つて何話すの？」

「それはですね魔女教の設立の報告と王国の一部の領土を拝借する交渉をしに来たんですよ」

死にかけの状態で交渉を行うのはズルいかも知れないが相手はあのファルセイル・ルグニカだ。友人だからといつてもボクには対等に交渉を行うだろう。

そう考えていると暫く待っていると云つた衛兵が戻つてきた。

「どうやらお前は本当にファルセイル様のご友人で間違いないようだな。よつてお前をファルセイル様の元へと案内しよう」

「それはありがとうございます。ファルセイルもいつ亡くなつてしまふのか分かりませんから急いで行きましよう」

はい、やつてきました王城へ！城内にいる色んな人から奇怪な目で見られているよ！

そりやそうやろ。衛兵に案内されているのがシヨタとロリの二人組だからね。それは誰からも変な目で見られるだろ。

「ここがファルセイル様がいる部屋だ。くれぐれも失礼が無いようにするんだな」

「ええ、わかっていますとも。さてパンドラ、行きましようか」

「うん！早く入る入る！」

此方を完全に舐めている衛兵に見送られたボク達はファルセイルのいる部屋へと入った。

そこは他の部屋と比べると随分豪華な部屋だった。まあ国王の部屋だから当然か。

「やっぱり君か、アルゴル。もうそろそろ来る頃だと思っていたよ」

「——キミは相変わらずお元氣：では無いわ。うん、死にかけてだし」
「いくら僕でも寿命には逆らえないからね『超直感』でも僕はもう長くないと悟ったよ」

「その割には最後に会った時と比べて全く変わってないよな、老けてないし」

今のファルセイルは八十歳になる手前だが外見は二十代前半になっていて最後に会った時と全く変わっていない。ええ：ボクが言うのもあれだけど本当にキミは人族か？

ファルセイルは寝ていた身体を起こしながら此方へと身体を向かせて話す。

「さて？君はなにやら僕へと話があるようだけどそれは何かな？」

「えつとねボクとジューズって言う人とここにいるパンドラで魔女教というものを設立したことの報告をしに来たんだよね」

「成程、ジューズとか。確かに彼は僕も知っている。何せフリーゲルの精霊だったしね。それで魔女教：それは具体的に何を目的にして設立したんだい？」

「いや、ね。サテラってさ。なりたくてあんなふうになった訳では無いじゃん？だって嫉妬の魔女因子が暴走したから『嫉妬の魔女』が暴

れたっただけで『サテラ』自身はそれを望んでいなかったよね？だからその誤解みたいなのを解くために魔女教を設立したんだけど……名前についてはあんまり深く考えなくていいよ」

「——理解はした。けれどそれを設立したとして活動場所はどこで行うんだ？各地を転々としていても重要拠点が無い色々損をするのではないか？」

確かにファルセイルの言うことには一理ある。アニメ本編でもペテルギウスはルグニカ王国の森の祠を根城として活動していた。

拠点というのはあるだけで大事って古事記にも書いてあった。だからこそ次の交渉はかなり大事になってくる。

「そこで次の話なんだけどき。ルグニカ王国の領地の中で使われなくなった所を拝借したい」

「——ほう、何を言い出すかと思えば領地の拝借ときたか。先程話に出てきた重要拠点を僕の国の領地にするのと遠回しに言っているな」
「うん、まあそんなところ。だから交渉をしよう、ファルセイル・ルグニカ。ボクは領地が欲しい。キミは王国内の魔獣をどうにかしたい。ならこうしよう。ボクに領地を貸してくれたら定期的に魔獣の殲滅を行う。この契約はキミが亡くなくても永続的に続く。更に国内の反乱や他国による悪意ある攻撃を受けた場合全面的に王族側に支援をする。一先ずこんなところだけどキミは何かないか？」

「君が何故僕が魔獣について悩んでいるのを知っているのかは置いておくが……ふむ、悪くないメリットではあるが果たしてこれを僕が亡くなった後も守るのが懸念してるな」

まあ確かにこの契約はボクとファルセイルの間で結ばれるのでファルセイルが亡くなった後に勝手に破るとなったとしてもそんな契約結んでませんか？と、言ってしまうばそれまでだ。

「それに関してはもうボクを信じろとしか言えない……と、思ってい

たけど一つ手がある。それは…これだ」

「これは…？石碑か？」

ボクがファルセイルに見せたのはスケッチブックくらいの大きさの石だ。ここにはずらずらと文字が書いてある。

「そう、石碑。ここにはさっき言った契約内容が書いてある上にボクの名前とボクと王族の魔力のみに反応するとある仕掛けを施した」

「とある仕掛けとは？」

「ん…キミ達には教えておこうかな。その仕掛けっていうのはね、今この交渉の全貌の記録映像が映るようになってるんだ。因みに今も記録されているからね。いえーい国王様見てる？って見てる全員国王だったか」

「そのような仕掛けとは…凄いな」

いや本当に作るの苦労した。めっちゃ試行錯誤しながら作ってたからこんな時間に時間がかかってしまった。ファルセイルよ、すまないな。

ボクが心の内で謝っているとファルセイルは暫く悩んだ末に結論を出した。

「アルゴル。君との契約を飲もう。僕は…いや、ルグニカ王国の国王は『敬虔の魔人』と契約を結ぶことに賛成した。よって一部の領地を明け渡すことにする」

「ありがとうファルセイル。さて、ボクはキミにこの石碑を渡すよ。大事に保管してもらってもいいかな？その石碑の仕掛けは教えたから次の代の王様やその次の王様みたいにその石碑の内容を説明して貰えると助かる…っていつでもボクは毎回毎回キミの子孫に挨拶しに行くと思うけどね」

「君はハーフェルフだったかな？願わくば君と僕の子孫も良い関係を築けて行って欲しいと願っているよ。ああ、友人の中で最後に会えた

のが君で良かったよ。ボルカニカとの約束の為に君を誘わなかったのもボルカニカのけじめが原因でね……おっと、今のは失言だったかな？」

「どういう事だ？ボルカニカのけじめ？全くわからん。」

そして何でキミはそんな謎のキャラムーブをかましているんだ？「君にはまだ早い」とか変なこと言っちゃっているよそんなお茶目な感じで言わなくていいからなんだこいつ？

結局ファルセイルに投げるように石碑を渡したボクは食べかけのリングを全部食べながら王城を後にした。

あ、パンドラは長い交渉が暇だったのかボクの隣で寝てました。何だこの小動物系幼女は。

うわっ……私の魔女教、やばすぎ？

「え？あ、アルゴル殿、今なんと？」

「魔女教の重要拠点をファルセイルとの交渉の末、拝借することが出来ました。なので各地を転々とする必要が無くなりました。と、言ったのですが……余計なお世話だったでしょうかね？」

これでジューズに「そうだよ（便乗）」とか言われたら脇目も振らずに泣く。ボクの努力を何だと思ってるんだーとか言ってそれはもう大泣きする。

「い、いえとんでもない！拠点をファルセイル様から拝借することが出来るなんて流石はアルゴル殿ですよ！」

「それは良かった。ファルセイルからどこの領地なのかは伝えられているので準備が出来次第教徒達を連れて出発しましょう」

ちなみにパンドラはボクの背中であた寝てますいっつも寝てるなあ……まあ軽いからいいんだけど。

「すっかりアルゴル殿はパンドラ様の保護者ですね」

「キミはどう見たらシヨタとロリが保護者と子供に見えるんだい？」

「ちよつと何言ってるか分からない」

「分かれよ」

教徒達を集めながらジューズがボクにそう言う。キミ最近ボクに對して遠慮なくなってるない？それと誰だよジューズにサン○ウィツ○マンのネタ教えたやつ褒めた後ぶつ飛ばしてやるから来なさい。

「アルゴル殿、出発の用意が出来ましたよ」

「では、行きましようか」

ボクを先頭にジューズと教徒達が後を着いてくる。こう見ると完

全に怪しい団体だよな。先頭にシヨタでシヨタの後ろをぞろぞろ着いてく黒装束の大人の集団…事案ですね分かります。

そういえばジューズに聞きたいことがあるんだった。

「ジューズ。キミはフリーユージェルの精霊だったのですか？」

「ええ。私は『嫉妬の魔女』を封印する前まではフリーユージェル様の精霊でした。フリーユージェル様との契約を果たす為に私は今このように行動しているのです。フリーユージェル様から託されたコレを管理しているんです」

そう言ってボクにチラリと見せてくるのは何かの黒い小箱。だが、その中から『ナニカ』が蠢いているような気がした。なんだあれ？

ボクはその小箱をジーツと見つめるが正直、見ただけで何か分かるものでもないのでスルーすることにした。

「そうなんですか。あ、森を抜けました。もう暫く歩けば目的地に着きますよ」

「んう…アルにいま朝…？眠いよお…」

おっとここでパンドラが起きてしまった。もう朝じゃなくて今お昼なんだよね。うん、寝すぎ。

「パンドラ。もうお昼です、起きてください」

「やー！リングが欲しい！」

「はあ……これでいいですか？」

ワガママなパンドラにリングを一個渡す。あれおかしいな？最近ボクの手持ちが貨幣とリングしかない気がする。その内身体中からどこでもリングが出せるンガンガの実のリング人間に……ならねえよ何言ってるんだボク。

「わあ！リング食べる！」

「種に気を付けて食べてくださいね」

もつきゆもつきゆと音を鳴らしながらリングを頬張る腹ペコ魔女。それを見ているジュースを筆頭とした教徒達は。

「やはりアルゴル殿はオカンなのでは？」

「小さな男の子に起こしてもらおう……イイ！」

「リングを渡されて気をつけて食べてくださいと男の子に言われたい人生でした」

「ちくわ大明神」

「誰だ今の」

うーんカオス。アレ？魔女教ってネタ枠だったかな？原作だとすっげえ無機質で機械みたいな集団だなどか思ってたけどちゃんと喋るしなんかある意味やべえのしかおらんのだけけど……なあにこれえ？（困惑）

「焦らなくても結構ですよアルゴル殿。何れ貴方も私達と同じこちら側へとなりますから」

「もの凄く不安しかないので……そもそもキミはどういう気持ちでそれをボクに言っているんでしょうか？」

「それは勿論、慈愛ですよ」

ええマジでなんだコイツら？何かアニメよりも取っ付きにくくなってんじゃないの？ツツコミが追いつかないしボクはそんな役回りにもなりたくない。

てかジュースその顔ヤメロイケメンがそんな顔すんなはつ倒すぞお前オラ。キリツじゃねえよ。アニメのお前どこ行ったよ。

「——パンドラはジュース達みたいになってはいけませんよ。あれらはダメな道を進み続けた大人達の末路ですからね。いいですか？」

絶対になつてはいけませんよ」

「うん！よくわかんないけどアルにいの言いつけ、しつかり守るよ！」

ほら見ろダメな道を進み続けた大人達ジューズ達。これがキミ達が見本とするべき子供の純潔だよ。分かったか！

「ジューズ殿、やはり彼は……」

「ええそうです。彼が最もナンバーワンホです」

「なるほどッ！参考になりますッ！」

何かジューズ達がヒソヒソと話してたが無視だ無視。今はただパンドラのお世話で忙しいんだ。

だからそんな子供を世話する親を見るような慈愛に満ちた目を向けるのを止めてくれぶつ飛ばしたくなるから。

§

魔女教はやバイやつらという事を認識できたボクは何時の間にか着いていた領地へと足を踏み入れた。

もう着いた、いやー色々な事があり過ぎて道のりがすっごい短く感じた。本当に。

「二先ず到着しました。ボクは周辺を探索してくるのでジューズは領地内を見てください」

「分かりました。パンドラ様はどうなさいますか？」

「アルにいに着いてく」

そう言つてボクの横に来るパンドラ。そしてこっちに向けて手を差しだした。手を握れつてことか？

ボクはパンドラの望み通り手を握ると笑顔だった顔がより一層増

した。

「えへへ…行こ！」

「——はい、そうですね。では、行きましょうか」

あつつつぶねえ!!今何か身体が宙を浮いていた気がするぞ!?絶対に今昇天しかけてたよ絶対に。

暫く周辺を探索すると森があつたのでその森に入る事にした。

「アルにい、この森ってリング何個あるかな？」

「リングのなる木があれば何個でも育てられる事は出来ませんがそれを探さなければなりませんね」

「じゃあ私が頑張つて探すね！」

「今はまだ安全の確認のため探索していますが安全だと分かればそれもいいかもしれませんね」

「やった！アルにい大好き！」

「——」

——あ、生きてた。尊すぎて魂がオド・ラグナまで吹っ飛んだと錯覚していたよ。パンドラの大好きやべえな。

ボクはパンドラの可愛さに戦々恐々しているところからか唸り声が森のあちこちから木霊した。ん？なんだあ…キミ達？

草木の陰から出てきたのは犬型の魔獣——ウルガルムだ。ウルガルムつて四百年前から居たのね。

「おや、これはこれは森の住民達の挨拶でしょうか？随分と殺気立っていますね」

「アルにい、全部殺る？」

「あまり不必要な殺生は好みませんが向こうはそうでも無さそうなので仕方ありませんね」

「グルルル…ッ！」

臨戦態勢を取ったボク達の戦意に反応してか一番前にいた一匹がこちらに向けて牙を立てた。ここからは10メートル程離れた距離にいたがその距離を通常の犬では考えられないスピードで詰めてきた。

これらはただの生き物ではない、魔獣なのだ。

実際にアニメでスバルがウルガラムに襲われた際、その恐ろしさを身をもって経験していた。ドンマイ、スバル。

兎に角、魔獣という存在は普通の人間では太刀打ちできない存在なのである。

「まあ、ボク達は生憎普通とは縁のない存在なんですよね」

「ッ!？」

「えいや! あつは! 一匹死んだ!」

ボクの呟きと共に此方へ噛み付こうとするウルガラムが絶命した。パンドラが跳んだ後、ウルガラムの頭を手で固定し、掴みながら頭を地面と腕力で挟み潰したのだ。おおう…グロい。スプラッター映画で稀にあるR-18Gみたいな光景を目の前でそれもウチの少女が起こしていた。なんか…なんとも言えない気持ちになった。魔獣を殺す幼女。うん、絵になる…やっぱならん。

そもそも魔獣って言ってもウルガラムの脅威度はそこまで高くないいや、以前殲滅したギルティラウよりはまだマシだね。アレはもうネタ感が漂っていた。アイツいるから大丈夫かって感じがした。

同胞が殺されたことによりさらに殺気立つウルガラムら。

あのさ。お仲間殺られて怒るのはもつともなんだけどボクも正直キミ達に言いたいことあるんだけど。

だつてさ? パンドラとせっかく二人でルンルン気分で見回り(という名の散歩)をしていたのにそれをノコノコやってきたキミ達に邪魔されて…これはもう何されても仕方ない、よね?」

「——時喰み」

瞬間、ボクはウルガルム達の時を喰らった。

時を喰らったと言っても大したことではない。これは一種のマナ回復だ。だが、行き過ぎるマナ回収は生命にも関わる…ので。

「おや？少し摂りすぎてしまいましたね」

「アルにいきい！どうやったの？」

「そこまで凄くはないですよ。あくまで失われてしまった魔法の端くれですの」

そこには白骨化したウルガルムの骨が散らばっていた。そう、大したことではない。精々自らの時が進むだけだ。

この魔法——というよりこれらの魔法は今『失伝魔法』といわれているらしい。らしいというのは実際ボクは使えるからね。不死王の秘蹟？アレはボク苦手なんだよね。そもそも死んだ者の魂がオド・ラグナへと行けないから。ボクにとって不利益だ。おっと、喋りすぎたかな？

「さて、では一度ジューズの元へ戻りましょうか。森にはウルガルムが蔓延っていますので探索の際は気をつけるように。と、報告をしに行きましょう」

「うん、そうだね。魔獣がいたらリング採れないからね！」

本当にパンドラってリングのこととボクしか考えてないんじゃないの？って思ってるんだよお兄ちゃんは。はい、愛されて嬉しです。

余談だがジューズたちは宴をしていた。いっぺん死ぬ。

それはとつても気持ち悪いなって

拠点を手に入れてからかれこれ約250年は経った。魔女教としての活動はぼちぼちといった感じです。あ、破壊活動とかはしてないのでご安心ください。

「おいカス……ほん、アルゴル殿。最近ルグニカ周辺にあるとある国が壊滅したとの報告が私の教徒から入ってきました。如何なされますか?」

「今カスって言いかけたよね? キミもうボクに対して遠慮をどこかに捨ててきたね?」

「貴方は何を言っているんですか?」

「もうヤダこいつ」

こんなのが破壊活動とかする訳ないだろういい加減にしろ。てかほんとに誰だよコイツ。もうアニメで見た狂気な一面持ち合わせていないだらうこれ。

「で?なんだったつけ? 近国の国が壊滅しただつけ? ほっとけばいいんじゃないかな? ボク達があくまでもルグニカに対しての助太刀しかしないんだから侵略とか戦争に発展しないなら放置でいいと思う」
「それがですよアルゴル殿。なんでもその壊滅の原因は一人の手によつて行われたとの事です」

「ふーん……一人の手によつて、ねえ」

別に一国が滅んだだの戦争に負けただの昔からよくある事だったのでさして興味は湧かなかったがそれを一人で行いそしてそれを成したのだ。

「もしかしたら何らかの魔女因子が宿った者による犯行かもしれないね。じゃあその調査はジュースが行ってきてね」

「何のためにこれを貴方に伝えたと思っっているんですか？絶対に嫌です。最近私は働きすぎなので貴方が行ってください」

「あ？？」

「逆に貴方は働かなさすぎですよ。ここ一週間は何をしていたか振り返ってみてください」

ここ一週間？えっとパンドラが私用とか言っ出て出かけるから出かける前に遊んだりしてたな。後は試したい魔法が出来たから魔獣で実験したりしてたな。あ、新しくなったルグニカの王様にも会いに行ったりもしたな。え？割と動いてない？

「ボク働いていると思うけど……」

「——はあ？」

やっべえジューズキレそう。(KONAMI感)

とか言ってる場合じゃなくてこれ逃げなきゃお説教ルートじゃん。ジューズに背を向けて逃走を試みるがいつものジューズとは比べものにならないくらい速さで近づかれ直ぐに捕まってしまった。

「HA☆NA☆SE」

「貴方がやる予定だった依頼を誰がやっていたと思っっているんですか？」

「ジューズ、止めてくれたまえボクの普段なら感じないはずの痛みを感じるんだ」

「今私の腕力はギャグ補正が入ってしまっしてね…貴方を止めるくらいの力を手に入れることが出来るんですよ」

「凄いご都合主義な能力だね?!」

ジューズに掴まれている両肩からギチチチ…と真面目に良くない音が鳴り響いてるんですけど。

許してくださいもう抵抗しないので、お願いします。

結局お説教を回避できずに一時間ほど縛られた後に件の詳細を聞いたボクはジューズに急かされ壊滅した国の元へとやって来た。

うわー本当に国が終わっちゃってるよ。ざっと覗いた感じ生存者ゼロじゃないか？それも何人が明らかに人の手によつて殺されてるよ
うな形跡が見て取れる。

「もうちよい都市部に行ってみましようかねー」

歩く、死体、歩く、死体、歩く…と繰り返しているとどうやらここがこの国の首都なのか街の残骸や死体がとても多い場所に着いた。

ここにも生存者は…いや、いたぞ？

首都のど真ん中の広場なのだろう。残骸が散らばっておらず、そこに人間が佇んでいた。

腕を天へと掲げ「僕を憐れむな！」と叫んでいる明らかにヤベエやつが、いた。

なんだあいつ？（思考停止）

幸いにも今あいつは此方へと背を向けている。逃げるなら今しか

ないな、うん。ボクは何も見えていなかった。

「そおーっと」

「おいー！そこで何をしているー！」

バレてら：バレちゃったなあ。本当にめんどくさい事になった。ええ？あれに意思疎通を行うの？無理じゃん。

改めてボクは彼の姿を見据えた。

白い髪に中肉中背の至って普通の男だ。奇抜な服装ではなく至って普通の服を着ており街に溶け込んでしまえばその顔すら忘れてしまいそうな普通の男だった。まあ、さっきの奇行で完全にヤバイやつだとボクは認識したけどね。

ボクがずっと黙っているのに腹が立ったのか謎の青年は顔色を赤くして叫んだ。

「あのさあ！君と僕って初対面だよ？それなのに君は名乗りもせず僕に僕の背後に立っているのは可笑しいよね？普通さ、後ろに立つなら一声かけるべきなんじゃないかな？社交辞令としても挨拶は大切なはずなのに君は常識ってものを知らないのかい？そんなことは無いはずだ！わざわざ僕に挨拶をしないなんてそれは、それは僕の権利を侵害するってことだ。僕の僕に許されたちっぽけな僕という自我を、私財を、僕から奪おうってことだ。そうに決まっている」

きつしよ。なんだコイツ？散々長ったらしくぶつぶつぶつぶ喋りだしたと思ったら完全に悪者扱いされているんだけど。

これはまたジューズとは別ベクトルでヤベエやつだな。

「とりあえずキミの主張は置いてこれは確認だ。キミがこの国を壊滅させたの？」

「僕の意見を無視するのか?!君は：君は神様にでもなったつもりなのか？ありえないありえないありえない！僕の僕という個人の意見を

無視するという人として出来てない君はとてもじゃないが真つ当な人間のすることとは思えない。異常者、そう！お前は異常者だ！」

絶望的に話が噛み合わないんだけど…どうして質問したことに對して神とか異常者とか言われなきやアカンのよ。悲しいよボクは。

未だずつと喋り続けている青年を見て不覚にも憐憫の眼を向ける——否、向けてしまった。

「ツ！その目を…そんな目で僕を見るなあ！」

「あつ？」

もうやだこの人…めっちゃ馬鹿にしてくると思っただら急にまたキレだしたし。この人怖いよお。

「——それは、いかに無欲な僕でも許せないなあ！」

「ふあ？」

なんとということでしょう。砂を持った謎の青年がボクに向けてその砂を投げてきた。攻撃か？と思っただがとてつもないスピードで此方へと向かってくる砂だったがボクの領域内に入った途端に地面へと落ちてしまった。と、なるど？

「——『権能』の類かな？若干騎士ナイトは徒手オプにて死せずオーっぽい能力だけナーそれだと砂が凶器になる要素がないからこれは無いね。なら一方通行アクセラレータのベクトル操作が有力かな。それならあのスピードも納得出来る」

「——は？…：…なツ?!なんで?!なんでなんでなんで!お前は、お前なんか、どうやって何をどうして、『強欲』の権能を!僕の権利を!お前は何なんだよもう!?理解が出来ない!」

あ、この能力『強欲』エキドナのなのね。随分と彼女らしくない能力へと変

貌したなあ…うん。で？お前は何者かって？

「はあ…やつと此方の話を聞く体勢に入れたかな？では自己紹介といこうかな。ボクはアルゴル。ただのアルゴルだよ。世間では『敬虔』の魔人とも言われているね。あ、後ねキミが宿しているその能力ね。ちよつとキミが持つとロクでもない事しそうだからコチラ側で管理させることにしたよ。うん、今決めた」

「な、何を言い出すのかと思えばお前たちで管理だって？そんな事をさせてたまるか。これは僕の、僕の僕というちっぽけな僕に許された僕だけのチカラなんだよお！」

そう言いながら戦闘態勢へ移行する謎の青年。はあ、穏便に物事を進めるのって難しいんだな。

完全に殺る気MAXな謎の青年を見据えながら此方も魔法を生み出すためのマナとゲートを機能させる。

「二応もう一度名乗っておくよ。魔女教創設者が一人、『敬虔』の魔人アルゴル。出来れば供養してあげるから名前を聞きたいな。大丈夫、楽に逝かせてあげるから。心配する事なんて何にも無い。ただキミはその運命に身を任せれば良いだけだから」

「——ふざ、けるなあ！お前が、僕を殺すだって？何を不可能な事を言っているんだ？僕の能力を突破したよく分からない能力もどうせ一度きりの、ハツタリだ！そうに決まっている。何故なら僕は『強欲』だから！覚悟しろよ愚図が。無惨な肉塊へと変えてやるよ！」

戦いの火蓋が今、切られた。

あ、因みにボクは『権能』は最後まで使うつもりだよ。ホントだよ？

『強欲』の真心

最初に仕掛けてきたのは謎の青年だった。

青年が息を吸って、吐く。途端にボクの中で警鐘が鳴り響き受けから避けに徹した。

するとどうだろうさつきまでボクが居た場所のは爆散しており、あれを喰らったら流石にそこそこもらっていたと思う。てか息吐くだけで爆散させることが出来るって益々能力が分からなくなってきた。空気のベクトル？

「さつきのはやっぱり偶然だったのかい？今のを避けるって事は僕の攻撃を防ぐ術がないって事だよな？」

「うるさいですね。口の前に身体を動かしてみてもどうですか？」

だってあいっ彼処から一步も動いてないんだもん。舐めプか？全く、ボクは本気でやってるのにやっぱあいっヤバいな。『無価値の贄』を使ってないのに本気でやっているとは勘違いしているアホささと、どうするか。一先ず魔法何発かぶち込むか。

「アル・ドーナ、アル・ジワルド」

牽制で放った二つの魔法だったが青年が腕を一振させると魔法が掻き消えた。うえ：マジかよ。地形に被害を与えないように手加減したとはいえそれを生身で受け止めんのかよ。それも埃一つ着いてない。非常に硬い強度……まるで将棋だな。あつ、そうか！

「あのさあ、これを見て分からないの？お前の攻撃は僕には効かない。それなのに君は何故僕に挑んでくるんだ？」

「無下限みたいにアキレスと亀みたいな法則を持つ能力はボクが前世の時に生きていた世界でしか無いと思う。あるとすれば色々候補が出てきている時間に関連する能力ならば……」

「思案すれば幾つかあった。が、どれも過去の並行世界へ時間遡行する魔法少女や止まった時の中動ける能力など時に関する能力は自身へ時間停止を掛けていなかった。」

「そこでボクはある能力を思い出した。」

「それはドラゴンクエスト　ダイの大冒険に出てくる術の凍れる時間の秘法だ。」

「これは掛けられた者の時間を停止させる術でミストバーンが使用していたのを前世で見たのを思い出した。」

「つまり、青年は他者の肉体に取り憑いている精神体なのか？」

「キミの”無敵化”のカラクリ、暴いたよ」

「なに——をッ?!」

「キミの権能は言うなれば『時間停止を自身や触れた物に掛ける能力』とでも言いましょうか。時間という概念からの束縛から脱却したモノはあらゆる法則を無視するんです。あくまでもこれは持論ですがね。そしてその権能には特殊な条件がある——その反応は凶星ですね。そしてキミの次のセリフは『何故君みたいな低俗な存在に僕分の、僕だけの高潔な『強欲』の権能が分かったんだよ!』という!」

「何故君みたいな低俗な存在に僕の、僕だけの高潔な『強欲』の権能が分かったんだよ!はッ!これもハツタリのうちかアルゴル!」

「いや、このネタ通じるんかい。何でこのネタが通じたのかはさておき、どうやら謎の青年の権能は考察した通りの能力だった訳だが……如何せん攻略が一気に楽になったな。」

「種明かしも済んだ事ですし、そろそろ幕引きと行きましょうか。結論から言うとその権能はキミが持つには大いなる力だった。例えるなら、そうだね……羨のなっていない子供にボルカニカと同じような力を与えたような存在だね。まあボルカニカはそんな脆弱性のある能

力なんて無いけど」

「——っ！ぎけるなあ！この僕を…僕を僕を僕を！コケにしたことを後悔させてやるからなあ！」

謎の青年はそう言った途端に人間では…いや、生物では考えられないような速さで此方へと突進して来た。これは幾つか摂られるかなあ？完全に気を抜いていたボクは不覚にもその突進をモロに受けてしまった。

ゴキ、メキヤと身体から完全に鳴ってはいけない音が鳴り響く。そして突進の衝撃でひしゃげる身体。空中で分解された四肢。少なくともこれを喰らってはボクもタダでは済まない。

はあ、こつちの能力を使うのは何時ぶりだろう。

「はっ。」

誰かが声を上げた。いや考えるまでもなく謎の青年だろ。それはそうだ。ボクを確かに殺したはずなのに何事も無かったかのようにボクが建物の残骸からひよっこり現れたからだ。

「な、何で……こんなっ、こんなの、おかしいだろお!？」

「——【悪魔の頭】」

ボクの登場に錯乱しだした謎の青年を睥睨し、ボクはボクたらしめる起源を言葉に乗せた。

バフオメット。アニメやゲームとかで聞いた事はあるであろうその名前。

ボクが使役しているそいつはボクの身に一定量の何らかのダメーシが与えられた場合に自動的に自身を防衛するように契約した。

契約、と言うとどこか精霊を思い出すが彼女はそんなちっぽけな存

在では無い。

「久々に顕現した割にはあまりはしゃがないんだね」

「——開口一番にそれなの?!お姉ちゃんはその様な事じゃなくて弟として久しぶりに会ったお姉ちゃんに言うべき言葉を聞きたいな?」

「キミは姉では無いしボクは弟になったつもりもない」

「もう!ツンデレなんだから♪」

「ぶっ飛ばすぞお前」

まあボクがぶっ飛ばそうとしたところで絶対に無理なのだが。

心の中で悪態をつきながら彼女を見上げる……べ、別にボクより身長が高いから見上げるような感じになっちゃう訳ではないんだからね!

髪の色と目の色は残念ながらボクと同じ。誠に残念ながらボクと同じなんだ……!

ずっと見上げて黙っていると不思議に思ったのか彼女は首を傾げハッ!と何かを閃いた。

「弟くんダメだよ!お姉ちゃんに惚れてるからってそんな熱い眼差しを向けられても……でも、もし弟くんが我慢出来なくなったら何時でもお姉ちゃんの所においでね♪」

「意味が分からない上に惚れてもないからとつとと失せてくれ、バフオメツト」

「むう…お姉ちゃん本名で呼ばれるのヤダな。ちゃんと”お姉ちゃん”って呼んでくれないとお姉ちゃんカナシイナー」

「はいはいお姉ちゃんお姉ちゃんお願いだから協力してください」

「分かったよ弟くん!一緒に共同作業頑張ろうね!」

「…… チョロいんだよなあ」

彼女はバフオメツト。別名、姉を名乗る不審者。

ボクがあの日魔女因子を宿した日からボクと共に在る誠に、誠に不

本意ながらボクの半身だ。

それ以上は分からないし別に理解したいとも思えない。自分自身を完全に理解するなんてそんな真面目なニンゲンなんて中々いないのと同じだ。

ただ、一つ言えることは――

「――あのさあ、どんな手品を使ったのかはこの後殺すお前らに聞く価値ないから僕は聞かないけどさ。普通アレを喰らってもピンピンしているなんて普通無いよね。僕をのけ者にして、和気藹々と楽しい話し合いはできたのかな？それは結構だ。でもさあ、それってさあ、どうなのかなあ!？」

言ってる事がハチャメチャな謎の青年が吠えると同時に腕を振り上げる。ボクは何もしない。ボクは、ただどね。

向かってくる真空の刃はボク達の目前まで迫るが。

「邪魔!!」

真空の刃の進行方向が逸れた。逸れたと言うよりは何かにつつかってズレたといったところだろう。

「なッ?!」

「弟くんとお姉ちゃんの仲睦まじいやり取りを邪魔するオマエには：それ相応の罰をお姉ちゃんが与えてるよ！はい、死ね♪」

彼女の宣告とともに謎の青年の身体から悲鳴のような音が聞こえて来た。それはそうだろう。ミシミシと骨が軋み、穴という穴から血がドバドバ流れ始めたんだから。要するに潰れている。文字通りペしゃんこになりかけている。

あーあ…結局名前聞けないまま終わっちゃいそうだな。

「ぼ、ぼぐはみどめないぞ…ごんな、ごんなの、つで！ぼぐは『ごうよぐ』の…れぐる…す、こるにあす…なのぢ」

「れぐるすこるにあす？それがキミの名前かい？随分と似合わない名前だね。でも良かった良かった、これでちゃんと埋葬出来るよ。御協力感謝する…なんてね」

「ねえ弟くん。コレ埋めるの？埋める価値あるかな？土に失礼だとお姉ちゃんは思うな♪」

「ぼ、ぐは…みだざれてな——あ」

人間として鳴ってはいけない音がして謎の青年——れぐるすこるにあす君は絶命した。

ね？最後だけしか『無価値の贄』は使わなかったでしょ？

本気を出すのが如何せんこのようにボクが少しでも瘴気を出すと戦いにすらならずには相手は発狂してしまう。これが死神と呼ばれる理由なのか？

ボク、ただ歩いてるだけで生物殺しちゃうのか。

「で？まだ続きをやりませんか？」

「な、なんで？なんでなんだヨー！」

そう言つてボクの前で声を荒げる亜人の一人が怨嗟の籠った目で睨みながらボクに言う。どしたん？話聞こか？

「オマエだつて、オマエだつて亜人族だロ？ナノにどうして王国についている!？」

「そうダ！オマエは亜人族の裏切り者ダ！」

……はあ？おたくら何言つてんの？たかだか100も生きてない小童のクセに何舐めたこと言つてんだ？

それにさあ、ボクはいくら人間とは違うハーフェルフでも亜人族つて言う括りでボクを纏めようとししないで。

それに意外とボクは短気なんだ。

だから少しくらいの癩癩くらい起こしても許されるよね？

「塵芥にしてあげるよ……このボクが誠心誠意の力を持つてこの地を、このアイヒア湿地帯を巨大な湖にしてあげるよ！感謝なんてとんでもない！ボクがやりたいなつて思ったことだからさ。キミ達は安心してそこから一切動かずに自身の運命に有難みを感じながら死ぬといい。そうだそうだ、逃げなくて大丈夫。ここら一带を湖に変えるだけだからどうせここに眠ることになる。だからキミ達は只々恭しく、慎ましく、畏んで、懇ろに、謙虚に、ボクを敬ってくれ！」

「ひいッ!!嫌だ嫌だ嫌ダ！じにだぐなイ!!」

「許してクレ！変なこと言つて悪かつタ！反省するかラ!!」

「そんな…キミ達はそんなに…泣く程なのか？泣く程…嬉しいのかい？嗚呼!!なんと敬虔な事なんだ！これは久しく見たことなかった死への信仰！テュフォン？否、これはミネルヴァだ！彼女程の生死の執着。これが…これがキミ達亜人族が考えていると思うと少々虫唾が走るがそれをボクが兎や角言う資格は存在しない。ボクは止めないしキミ達も考えるのは自由ということだ。さてさて、準備が整った。最後に何か言う事は…ってそんな事は無いか。何故ならキミ達はこれから死という名の祝福が待っているんだから。誰かが言った。死は救済だと。ボクはこれを初めて聞いた時なるほど、と納得同時に感嘆した。だからボクは死とは何かを考えた。そして見つけた。『死は祝福への第一歩』ってね。救済の前には希望があるよね？でも死は絶望とも言う。矛盾してるよねこの二つって。でも矛盾しているようで矛盾していないんだよ。これも誰かが言ったかな。表裏一体って。だから表が希望⇨救済なら裏は絶望⇨死となる。ここでさつき話した死は救済へと繋がる。死⇨救済ならまとめると希望⇨救済⇨死⇨絶望になるよね。これ考えた時ボクは感動…嫌、そんな半端な感情では無かったよ。神へと祝福された気分だった。そこでボクは思ったのさ。死は祝福への第一歩だと。つまり何が言いたいのかと云うとボクは敵対したモノですら絶対的な救済^死を与えるともとても敬虔な人物なのだということだよ。おっとと…話が余計に拗れてしまった。この手の話となるとどうしても長く喋り過ぎてしまうクセがあるからね…済まない済まない。だから…さ、安心して死んでくれ。大丈夫大丈夫、死ぬ時はここらにいる周辺の亜人族も一緒だから。王国側の被害も考えなくてもいいよ。キミ達は人間が嫌いだもんね。一緒にいる空間が嫌いだと思うからキミ達亜人族だけが被害になるように魔法を打てば済む話だよ。そんな魔法あるのかって顔してるね。はたまたそれとも嬉しすぎて賢者タイムにも入ったのかな？それはさておきさっきの疑問は直ぐに分かるよ。ボクが暇な時間で考えて作った失伝魔法のみを混ぜて創った混合魔法だからボクだけがこの世で使えるとおきの魔法さ。しかとその身に味わうがいい。自身の祝福とともにね！『雲海暴発』」

嗚呼、泣きながら喜んでくれる。嬉しいな。
でもちよつと…眠くなって来た……な——あ。

「——はっ！戦場で昼寝とは我ながら随分危ないなあ」

いやほんとに。何か危ない発言や魔法ブツパしてた気もしなくもないが全く覚えがない。それにここアイヒア湿地帯だよな？

「湖なんかあったっけ？」

ボクが起きて早々目前には琵琶湖も吃驚な綺麗な湖が出来上がっていた。もうアイヒア湿地帯じゃなくてアイヒア湖に名前変えてしまえ。

後は…敵どこ行った？あれれ？周りもなんか静かだし争ってたよね？戦争終わった？

疑問が尽きないがとりあえずボクが起きたのに気づいた兵達は何故か感謝してきた。どゆこと？

なにになに…ふむふむ。それボクじゃなくない？でも魔法でここを湖に変えてた？そうですか……ふーん。

「ボルドー君。それ本当にボクがやったのなら色々和不味くないかな？」

「大丈夫ですよアルゴル殿！」

そう言ってくれるのはピボット君。何でも亜人族の殲滅を行う際の必要な犠牲だったと言う。いや土地に犠牲も何も無さそうだが…ほら、戦争の舞台として使われてる時点だね。

結局ボクがやった事になったアイヒア湿地帯アイヒア湖事件はジ

オニス君から勲章と共にこれからも頑張ってくださいという小言と正式に二つ名が『魔人』になる事になった。ジオニス君って実はボクの事嫌いななの？

終戦まで後9年――